

保 健 体 育 科

豊かなスポーツライフを実現する 資質・能力の育成へ向けた授業改善

～課題の合理的な解決に夢中になる生徒の育成に向けて～

山田大生
松本菜美
廣瀬恒平

1 研究主題について

平成 29 年 3 月に告示された中学校学習指導要領において「豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力」を育成することが示された。また令和 3 年 1 月の答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～では、「社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難となってきている中、子ども達の資質・能力を確実に育成する必要がある、そのためには新学習指導要領の着実な実施が重要である」等が示された¹⁾。本校保健体育科では令和元年度から 3 年間の計画で『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善を研究課題とし研究を進めてきた。成果として、課題解決に向けた対話を促すための工夫や対話的な学びを生み出す「問い」の工夫の有効性を示し、資質・能力の育成の助けとなる評価方法に関する実践例を提供することができた。しかし、保健体育科の目標である「生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する基礎を培う」という点についてこれまでの実践を評価することができなかった。本校においても、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成に向けて新学習指導要領の着実な実施を、令和の日本型学校教育の実施という視点をもって積極的に進めていく必要がある。以上のことから「豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成へ向けた授業改善」を研究主題とした。

次に副題の「課題の合理的な解決に夢中になる生徒の育成に向けて」と主題との関係についてである。令和元年度から 3 年間で進めてきた研究を振り返ると、授業が教師主導に陥るとい課題があった。変化の激しい社会の中で豊かなスポーツライフを実現していくためには生徒が主体となって変化に対応していく力の育成が必要だと考える。そこで、生徒が夢中になる授業づくりの中にこそ、生徒の主体性の育成や資質・能力三つの柱の育成を効果的に進めることができる鍵があると考え、上記の副題を設定した。

2 研究の内容と検証方法について

学校研究で示した通り、挑戦心には「困難な物事や新しい記録などに立ち向かうこと」という意味がある。本校保健体育科では、図 1 のように自分の世界（人が経験を通して築いた「自の世界」）から他の世界への矢印のことを挑戦と捉えている。松田（2016）は「自分の世界と他の世界との境界には『できそうでできない』とか『ワクワクドキドキ』というような学習者が夢中」になれる領域があると述べている²⁾。ここが充実した時に大きく挑戦心を刺激することができる。よって私たちはこの周辺領域を「個別最適な課題」と捉え、様々な工夫によって充実させることで生徒の夢中を引き出す授業を実現することで、挑戦心や三つの資質・能力の育成につなげていく。

本校保健体育科が考える、「夢中になっている生徒の姿」について以下のように示す。

夢中になっている生徒の姿（授業で目指す生徒像）

○目的を自覚し、これまでの考え方や解決の仕方等の方略を吟味して、改善や修正をし続けている。

研究仮説を以下の通り設定し、夢中になる生徒の育成に向けて取り組むこととした。

【研究仮説】

生徒の夢中を引き出す授業を実現できれば、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することができるだろう。

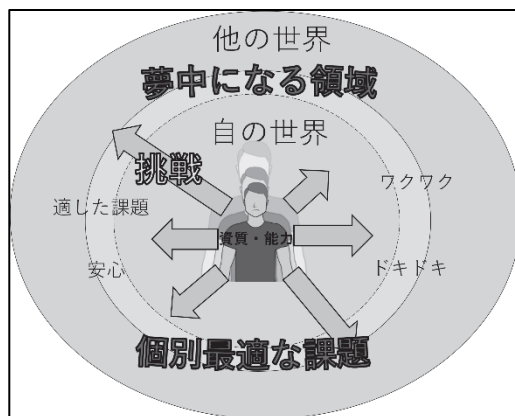


図 1：挑戦心と夢中の関係

仮説に基づき、以下の研究内容を具体化した。

- (1) 豊かなスポーツライフを育成する資質・能力と夢中との関係を定義し、個別最適な学びの中で夢中を引き出す手立てを実践する
- (2) 協働的な学びの中で夢中を引き出す手立てを実践する
- (3) 楽しくて、夢中で取り組む授業における指導と評価の一体化についての実践をまとめる
- (4) 4年間の研究から豊かなスポーツライフを実現する資質・能力と夢中との関係をまとめる

また、4年間の研究成果を以下の五点をエビデンスとして検証することとした。

- (1) 単元のはじめと終わりに行う診断的・総括的授業評価のアンケート結果の比較¹⁾
- (2) 毎時間授業後に行う形成的授業評価の結果の比較
- (3) 単元のはじめ、なか、終わりに生徒が記述する学習ノートの記述内容のテキストマイニングによる比較（以下に示す夢中に関わる語の頻出状況の比較。ただし今後この語の内容も検討していく）

夢中に関わる語：努力 一生懸命 試して 続けて 熱（熱心、情熱） 没頭して 興味 楽しい 興奮 目的 努力 吟味 積極的 集中 注意 チャレンジ 最後までやり抜いて 丁寧

- (4) 単元のはじめと終わりの生徒の動きの比較
 - (5) 単元のはじめと終わりの学習ノートにおける記述内容の比較
- この五つの視点によって豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成へ向けた授業改善を実現できたかどうかを検証していく。

3 研究計画について

研究計画について以下に示す。

研究主題：豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成へ向けた授業改善	
副題：～課題の合理的な解決に夢中になる生徒の育成に向けて～	
1年次	○生徒の夢中を引き出す指導の工夫 手立て1 夢中を引き出す課題設定の工夫 手立て2 夢中を引き出す個別最適な学びの工夫
2年次 (本年)	○生徒の夢中を引き出す課題解決的な学習の工夫 手立て1 夢中を引き出す課題設定と個別最適な学びの工夫（1年次の実践）の検証と改善 手立て2 夢中を引き出す協働的な学びの充実による課題解決的な学習の工夫
3年次	○生徒の夢中を引き出す指導と評価の一体化の工夫 手立て1 夢中になっている自分や他者を育てるフィードバックの在り方 手立て2 夢中になっている自分や他者を育てる振り返りの工夫
4年次	○夢中を引き出す課題解決的な学習と資質・能力の育成 手立て1 資質・能力を育む指導と評価の実践と検証 手立て2 豊かなスポーツライフを実現する資質・能力と夢中の関係についてのまとめ

このように研究主題の達成に向けて、4年間をかけて計画的に研究を進めていく。

4 本年度の「生徒の夢中を引き出す課題解決的な学習の工夫」に向けた研究の手立て

本年度の「課題解決的な学習の工夫」は以下の二つの手立てによって進めていく。

〈手立て1〉夢中を引き出す課題設定と個別最適な学びの工夫

- (1) 夢中を引き出す課題設定の工夫について一年次の工夫内容の検証の結果、本年度は以下の二点を工夫することとした。
 - ・診断的評価を活かし、三つの資質・能力に関わる学びの目標像を吟味された映像とともに分かりやすく示し、教師と生徒で共有できる時間を設定する。
 - ・生徒が自分の学習状況を振り返り、課題を明確に持ち直す場を設定するとともに、自己決定を大切にすることで、夢中になって目標に向かえるように工夫する。
- (2) 夢中を引き出す個別最適な学びの工夫について一年次の工夫内容の検証の結果、本年度は以下の四点を工夫することとした。
 - ・ICTを用いて三つの資質・能力の定着を確認できる確認問題や体育の見方・考え方に関わる本質的な問いに挑戦させ、実態把握に努める。
 - ・単元の後半にパフォーマンス課題を位置づけ、パフォーマンス課題の実施に向けて学習を充実させるとともに、各個人が単元全体の学習を振り返る機会にする。

- ・ 形成的授業評価のアンケートを実施し、教師が授業改善に生かすとともに、そのアンケート結果を開示し、生徒が学習改善に活かせるようにする。
- ・ 自分の運動の映像を撮りためて、目標像となる映像や単元当初の映像と比較して自分の学習を振り返り、eポートフォリオとして新たに学びを深める機会とする。

〈手立て2〉 夢中を引き出す協働的な学びの充実による課題解決的な学習の工夫

令和の日本型学校教育において個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が注目されている³⁾。協働的な学びに関して答申では「子供一人一人のよい点や可能性を生かし、子供同士、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働する」ことであると示されている。本校保健体育科ではこのことを「集団の中で個が埋没しないという視点での授業改善」と捉え、一人一人が自信を持って関われるように以下の視点で工夫をした。

- ・ 課題解決学習を進めるために単元の中で「目標の設定」、「課題の分析」、「練習の選択と練習」、「練習の有効性の検討」、「練習と新たな課題の分析」を何度も実施できるように計画し、トライアルアンドエラーを繰り返す中で課題解決に夢中になっていけるようにする。
- ・ チームで課題解決に取り組む際に、いくつかの役割を分担し、それぞれの立場から意見を述べられるように工夫し、話し合いが活性化する中でチームや個人の課題を解決することに夢中になるようにする。

5 研究の実際について

(1) 夢中を引き出す課題設定と個別最適な学びの工夫 〈手立て1〉

① 三つの資質・能力に関わる学びの目標像を映像で示し、教師と生徒で共有する実践

第一学年球技ゴール型サッカーの授業において、思考力、判断力、表現力等の学びとして「提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に仲間の課題や出来栄を伝えている」ことを目指した。その際に図2のように具体的かつ的確にという目標像を確認した。そして実際の映像を用いて具体的に理由と根拠を述べながら、話し合いが進む状況を全体で共有した。授業の中では具体的に伝えようといつもより丁寧な説明で伝えたり、的確な意見を伝えるためにゲームの分析結果を真剣に見直す姿を看取ったりすることができた。学習カードには「チームの仲間自分の考えを伝える時に、具体的な例を出して伝えるとチームのみんなが確かにと納得してくれた」などの記述が見られ、目標像の共有によって学習しやすい環境を整えることができた。同じく「知識及び技能」「学びに向かう力、人間性等」の学習においても映像と解説によってわかりやすく示すことで、学習によって目指すべき内容が共通に認識され、生徒間で目標に関する会話が増える傾向が見られた。



図2：明確に示す目標像

② 自分の運動映像を撮り貯めて、目標となる映像や単元当初の映像と比較し学習を振り返る実践 (個別最適な学びの工夫)

試合の映像は最初の試合から撮りためてeポートフォリオとして共有することで、自チームの映像を誰でも見られるようにした。撮りためていくことで、過去の映像と比較したり、目標像と比べて課題に気が付ける機会が増えた。単元の最後の時間にパフォーマンス課題に取り組む際には、これまでの映像を何度も見返しながら、図3のように映像から自チームや自分の成長が一番わかる瞬間の画像を切りだしてポスターにまとめることにした。生徒は真剣に映像を何度も見返しながら、自分の動きの変化に注目することができていた。パフォーマンス課題に記述された「最後のほうになるとドリブルやパスでボールを動かせるようになり」のように自分の成長した姿に気が付き、客観的に表現できるようになった。このように映像を残していくことで生徒は自分の学びを記録し、見直すことができ、課題提起から解決までの実績を視覚化できるようになった。教師はデータを基に評価や指導を見直しできるようになり、生徒の特性に合わせて指導内容を改善できるようになった。両者ともに、ゲーム観察によるできたとかできないだけでなく、なぜできたのかに視点を当てることで、他領域でも汎用できる力と自信の向上につなげることができた。

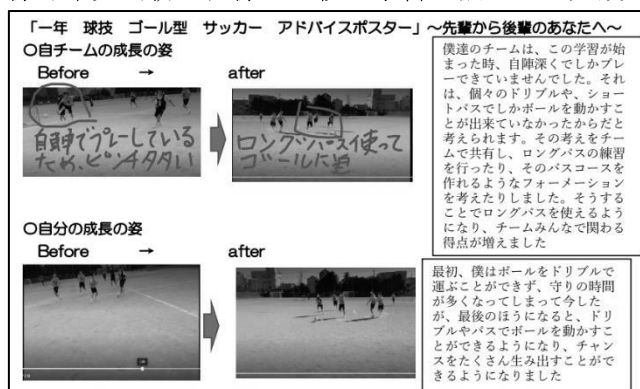


図3：映像を分析して示す成長の姿

(2) 夢中を引き出す協働的な学びの充実による課題解決的な学習の工夫〈手立て2〉

① 「課題の設定と分析，課題解決のための練習の選択」を繰り返し，課題解決に取り組む実践

第一学年球技ゴール型サッカーの授業において，思考力，判断力，表現力等に関する学習の時間を9時間単元の中で図4に示したように5時間目，6時間目，7時間目に設けた。チームで行う種目なので，チームの課題なのか個人の課題なのかという二点が混合しやすく，何について考えているのかが生徒にとっても教師にとっても分かりづらい授業に陥りやすかった。そこで本単元ではまず5時間目の時間に「チームの戦い方について話し合う」時間を設けた。その上で「そのチームの戦い方を行う上での個人の役割を決定する」ようにした。この二つが決まった上でゲームに臨み「チームや個人の課題」について話し合いを行った。そして6時間目はその課題を解決するための練習方法をこれまでの学習から選択し，練習に取り組むこととした。最後に7時間目には「練習方法が本当に課題の解決につながっているのか」を考えさせ，ゲームを繰り返しながらこれまで考えてきたことに戻りながら，何度もトライアルアンドエラーを繰り返せるようにした。協働的な活動が多い集団競技において，個別最適な学びを強調すると個人の世界ばかりが関心ごとになりがちである。協働的な学びの側面から捉えなおすことで，あらゆる他者との関わりの中での自分が見えてくるようになる。それによって自分が何を目指すべきなのかがよりはっきりする。他者からの働きかけで，自分の世界が見えやすくなり，挑戦すべきところが分かりやすくなることで，夢中になっていく姿が見られた。

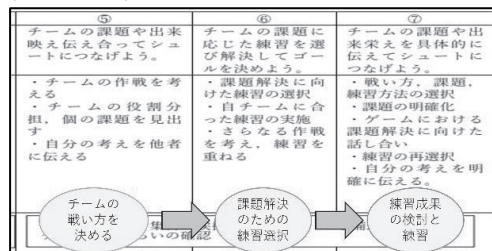


図4：課題解決に取り組む手順

② 役割分担によって立場の違う意見を交換しながら課題解決に取り組む実践

第一学年球技ゴール型サッカーの授業において，7時間目の課題解決に向けた話し合いが活性化することを旨として，役割分担を行って，それぞれの立場から意見を交換できるようにした。具体的には図5のように「ゲーム分析シートを用いてボールをどのように運んでいるのかについて語る係」，「作戦ボードを用いて具体的にどうやって人とボールが動くべきなのかを語る係」，「試合映像を用いて，具体的な場面を用いて改善案を提案する係」，「練習メニューを調べて，選択し理由も添えて提案する係」という四つの係に分担して，それぞれの立場から意見を交換することとした。次の時間からリーグ戦を行うという配置をすることで，勝利に向けて全員が本気になって意見を交換してチームの課題解決に向けて語り合う姿が見られた。いくつかの視点から意見を伝えられることで，チームや個人の課題が明確になる。そのことでやってみようといういつもより主体的な姿が見られた。課題解決に取り組む際には，分析シート係，映像分析係，作戦ボード（個人種目ではヒト型マグネット）係，練習メニュー係というようにいくつかの係を決めて，話し合いを行うことでより活発な話し合い活動になり，チームや個人の具体的な課題が見えやすくなる。

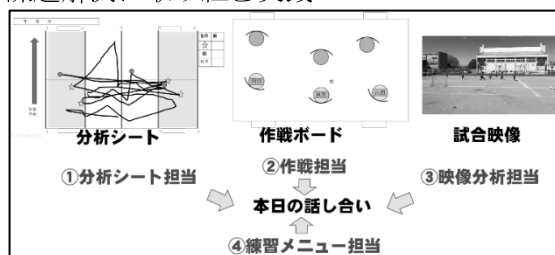


図5：四つの役割分担からの話し合い

6 本研究のまとめ

本研究によって，課題の合理的な解決に夢中になるために必要な資質・能力の育成に向けて診断的評価を活かした夢中を引き出す課題設定の工夫と個別最適な学びの視点からの工夫について昨年度の研究を改善した実践例を示すことができた。また，協働的な学びの視点から課題解決的な学習の工夫に関する実践を示すことができた。検証の方法に示した診断的評価やテキストマイニングの成果を今後十分に検証し，次年度の研究につなげていきたい。

【引用・参考文献】

- 1) 中央教育審議会 (2021)「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～ (答申)
- 2) 松田恵示(2016)「遊び」から考える体育の学習指導 p. 197 創文企画
- 3) 西岡加名恵(2021)教育評価重要用語事典 p. 35 明治図書
- 4) 西岡加名恵(2008)「逆向き設計」で確かな学力を保障する p. 10 明治図書
- 5) 高橋健夫(2003)体育授業を観察評価する p. 163 明和出版